

「甲南リベラリズムの源流を求めて——平生夙三郎の建学精神と地域開発」

中島俊郎（文学部）

甲南大学の建学精神であり、精神的な支柱でもあるリベラリズムの発生と展開を「郊外開発と文化活動」という視座から、当チームは検証しようとするものである。

甲南大学が設立された「岡本」という地は、大正9年における阪急電車の大阪梅田と神戸上筒井間の開通とともに住宅開発がなされた、いわば典型的な郊外地域である。そもそも「郊外」という言葉には、いかなる歴史・文化的な意味が含有されているのであろうか。

日本語の「郊外」という言葉は、英語の‘suburb’から由来する。この語は14世紀に古代フランス語‘suburbe’から英語へ移入され、すでに『カンタベリー物語』（1386）には今日使用されている「郊外」という意味で用いられている。だが、都市と周縁市街という図式が明らかになる近代においてこそ、「郊外」という意味が明確になり、限定的になってくるのである。仕事を実践する都市という場と、居住する郊外とを結ぶ交通網の整備が果たされた産業革命後のロンドンこそがまさに郊外と都市の関係をあらわにしていくモデルととらえることができよう。それはジョージ三世の治政下のことであるが、ステージ・コーチという高速の馬車を駆使して、また道路整備もともない、富裕な商人層が都市と郊外を往復し、何も存在しなかった原野、鄙なる寒村が急速に「街」の機能をもつ郊外へと発展していったのである。ロンドン郊外のブラックヒース（1795）、ブリストル郊外のブレイズ・ハムレット（1811）などが代表例で、前者はマイケル・シールズ（1750-1813）、後者はジョン・ナッシュ（1752-1835）の手によって開発・発展された郊外都市であった。こうした郊外開発の初期例を参照しつつ、郊外における教育機関の歴史的な展開を検討してみると、郊外における教育という関係が顕現してくるのである。

翻って大正年間の郊外開発と教育の関係に着目するとき、そしてイギリスの郊外開発の諸例を重ねてみると、郊外における新しい教育の姿を垣間見ることができよう。

日本最大の工業都市であった大阪は、1912年までに毎年、平均2万戸以上の住宅不足を示していた。まだ産業汚染から引き起こされる劣悪な住環境は、健康に対して脅威となり、公衆道徳においても著しい低下をまねくところとなった。大都市・大阪は、すべての元凶である人口過密問題を早急に解決しなくてはならない局面に直面していたのである。新しい郊外の居住地を供給したのは、箕面電気軌道であり、区画した土地を不動産会社、個人へ販売して新しい住居建設へと赴かせたのであった。ただ、そこには郊外地をいかなる街にしていくかといった全体的なヴィジョンは皆無であったため、近い将来に唱導される都市計画からはほど遠い現状であった。

こうしたなかで1922年にきわめて高度の都市計画が実践された。それは「千里山」地域である。大阪へ通勤する労働者向けに大阪住宅経営会社と、当時大阪市助役であった関一（1837-1935）が中心になり、北大阪電気鉄道、大阪に基盤をおく会社などが共同でこの事業を推進していった。ある意味でエベネザー・ハワード（1850-1928）が唱えた田園都市

構想は、田園調布以上に千里山でみごとに具現化される場所となったのである。今日の高層住宅が林立する千里山の現状からすれば皮肉な様相かもしれないが、関は集合住宅に反対であった。巨大な建造物は子供の自由を奪い、家の中に閉塞してしまうことを恐れてであった。田園都市構想のなかで育まれた郊外都市である千里山地域とその教育環境の研究もかなりの知見を投げかけてくれるはずである。ハウードの田園都市構想は汎世界的な規模で拡大化していったのであるが、日本の郊外都市もその一環であったことを忘れてはならない。

以上のように当チームは、郊外における教育システムの生成を、主としてイギリスの先例に近隣の郊外住宅の諸ケースを重ねて検討している。